

幼なじみが多すぎる

多すぎるのだ、幼なじみが。

いや、多すぎるというのは、言いすぎるかもしれない。幼なじみが多い、のではないか。そういうことである。

数え上げたわけじゃない。印象である。しかし、たしかに、そう感じたのだ。一昨年のことである。本誌二〇二〇年五・六月号の総論を執筆するべく、対象作品を集中的に読んでいたときだ。

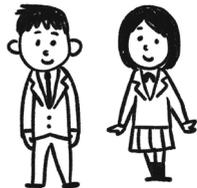
ん？

その言葉が目に入った。しかも数多く。

こちらの作品、あちらの作品、はたまた向こうの作品……「幼なじみ」「幼なじみ」「幼なじみ」……。エンタメ路線の恋愛ものはもちろん、リアル路線の作品にも出てくる。「友人」や「友達」「クラスメイト」ではなく、わざわざ「幼なじみ」という属性を付与された人物がやたらに目についたのだ。

これは、どうということなのだろう。何か意味があるので

東野 司（編集委員）



はないか。

それが幼なじみ特集を提案したきっかけである。

幼なじみはマンガやアニメ・ゲーム、ライトノベルなどと親和性が強いイメージがある。だから、児童書で多数目にして、気になったのだろう。

では、マンガやゲーム、ライトノベルなどでは、幼なじみはどのような意味をもつてとらえられているのだろうか。「幼なじみ」をキーワードとして、マンガ、アニメ・ゲーム、ライトノベルにおけるラブコメの歴史を綴った、玉井建也の『幼なじみ萌え ラブコメ恋愛文化史』（幻冬舎二〇一七年）には、「そもそも幼なじみは関係性であった、本人の資質ではないのだ。」（同書P56）と記されている。

幼なじみとは、「ただ幼い時に親しかった人」というそののみで成立する属性なのである。性格、容姿、主人公との相性などとは無関係に、それらを飛び越えて成立してしまふ。それゆえに、幼なじみは物語の構造さえも越える、